

三春

わが街

■コミュニティだより 第7号

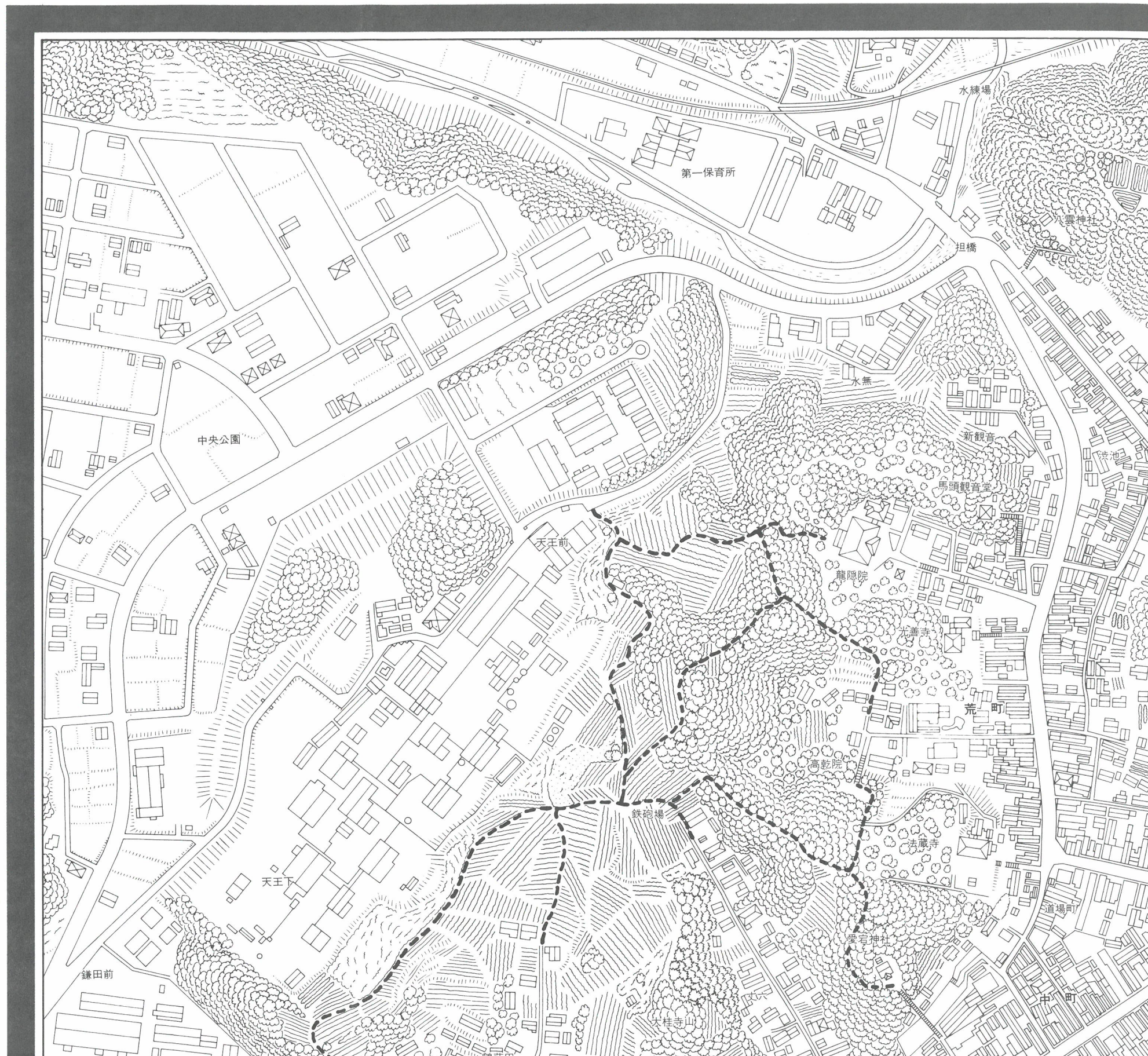
昭和62年3月31日



街並特別委員会特集号

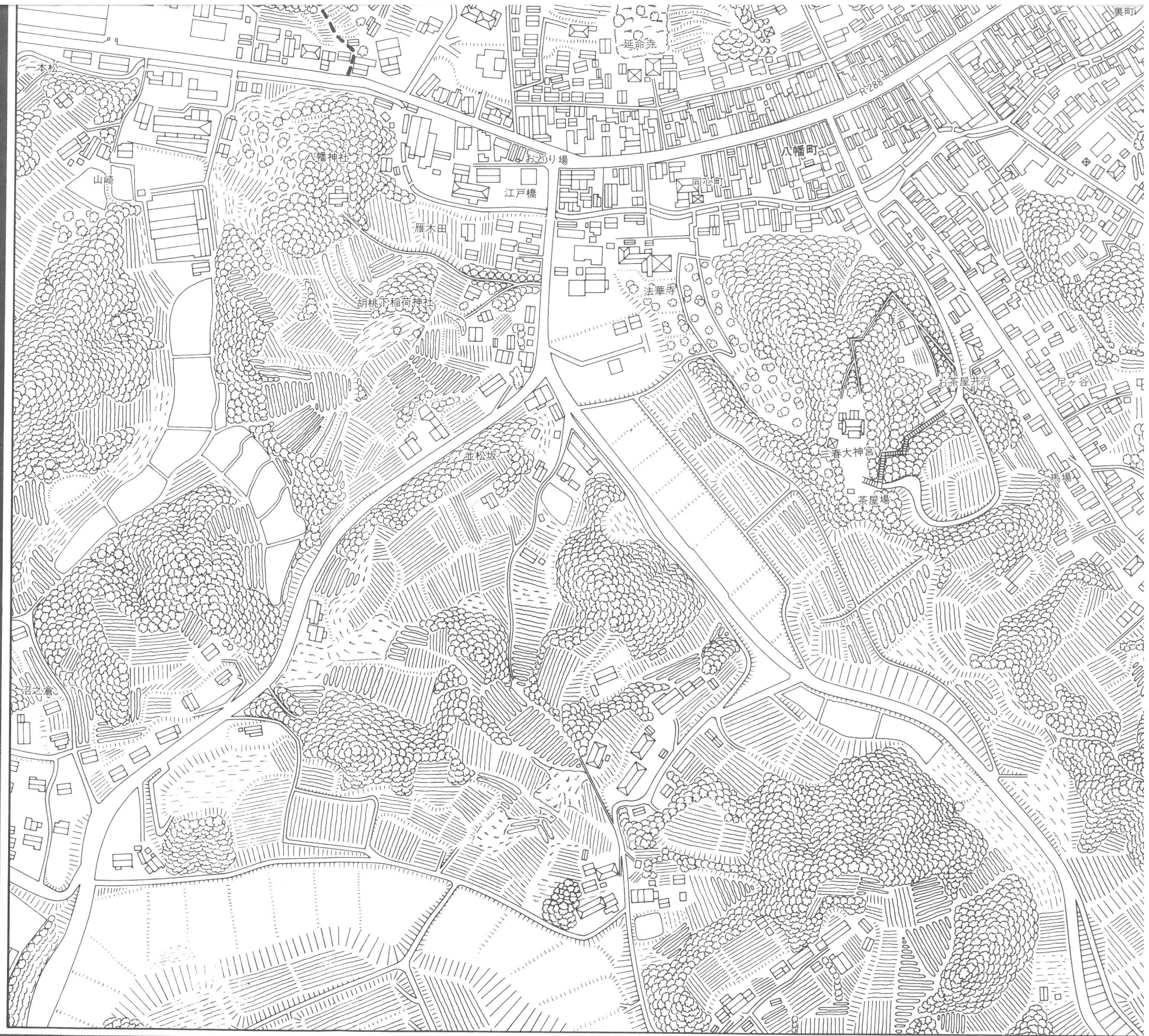
■発行 三春まちづくり協会

■編集 三春まちづくり協会調査広報特別委員会

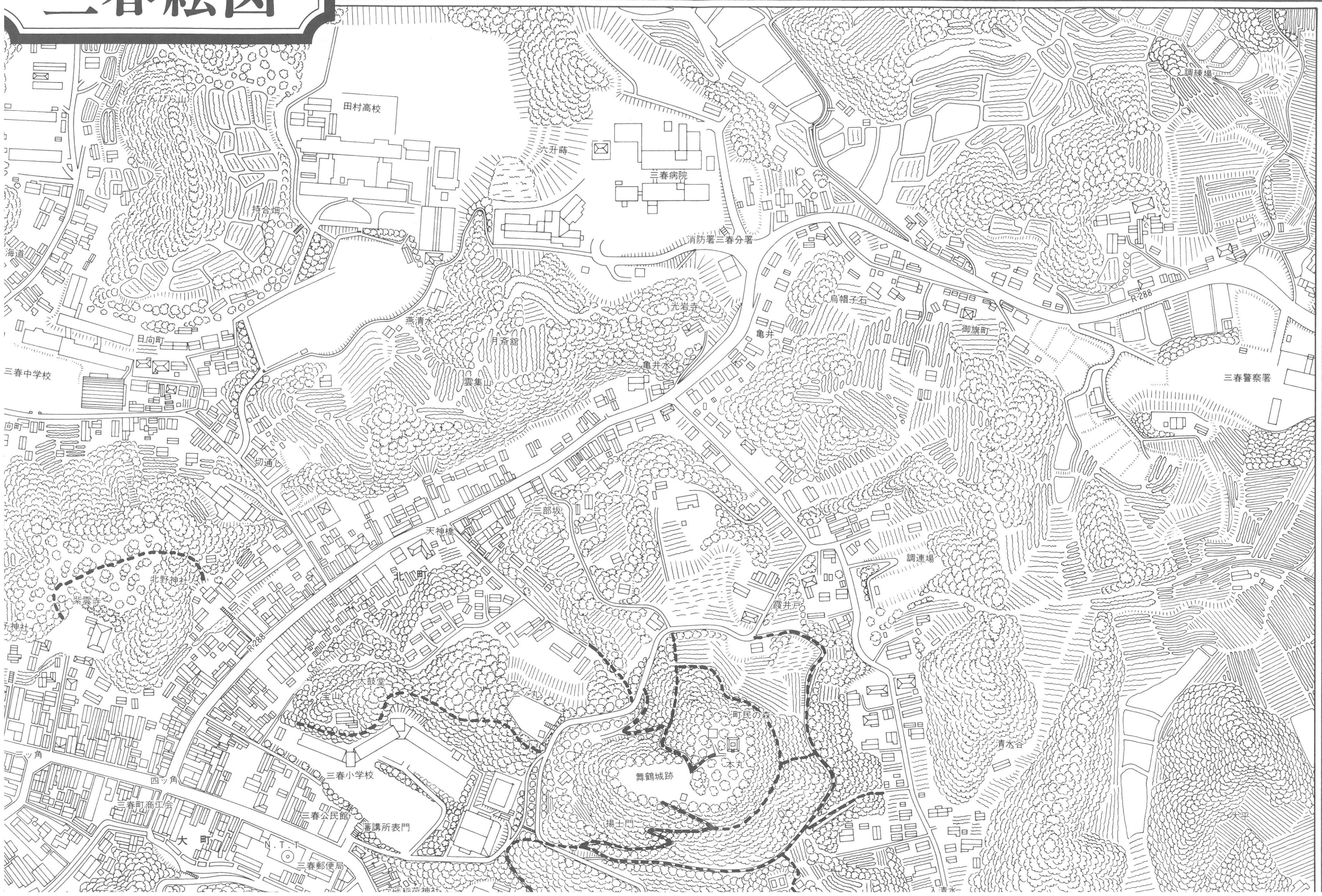


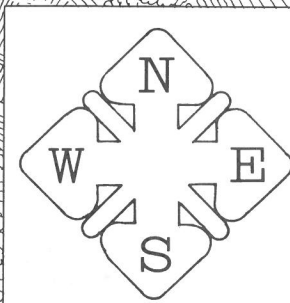
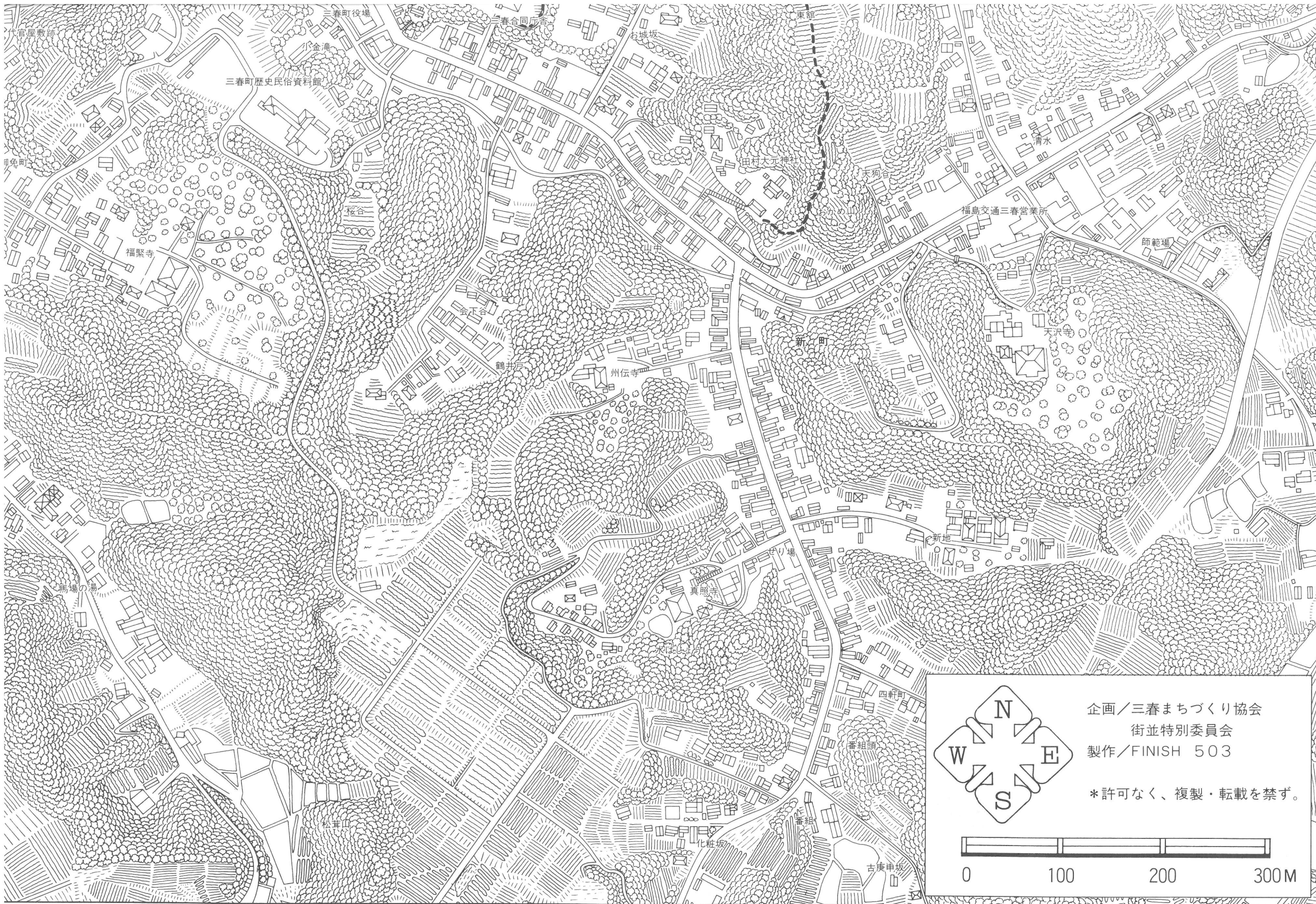
三 春 歳 時 記

1月 睦月	○正月 ○農の始め・作試し（11日） ○だるま市（12日）
2月 如月	○節分（3日）
3月 弥月	○ひなまつり（3日） ○中学校卒業式（14日） ○春分の日（21日） ○小学校卒業式（23日） ○春の彼岸（18～24日）
4月 卯月	○水ばしょう花開く（上旬） ○小・中学校入学式（6日） ○胡桃下稲荷神社祭礼（15日） ○お花見（中旬） ○八幡神社祭礼（第3日曜） ○愛宕神社祭礼（24日） ○北野神社祭礼（25日） ○滝桜みごろ（下旬） ○小学校運動会（下旬） ○町消防団春季検閲（29日）
5月 皐月	○花まつり稚児行列（上旬） ○端午の節句（5日） ○春の衛生掃除 ○守城稲荷神社祭礼（9日）
6月 水無月	○さつき展（上旬） ○夏至（22日）
7月 文月	○七夕祭り（7日） ○桜川清掃（第1日曜） ○花市（12日） ○田村大元神社祭礼（21日）
8月 葉月	○八雲神社祭礼（26日） ○墓参り（13日） ○町内各地の盆踊り（12日～） ○三春観光盆踊り（15・16日）
9月 長月	○王子神社祭礼（19日） ○秋分の日（23日） ○秋の彼岸（20～26日）
10月 神無月	○三春大神宮祭礼（1～3日） ○お月見「中秋の名月」（7日） ○秋の衛生掃除 ○文化祭（中旬～） ○えびすこ（20日） ○町消防団秋季検閲（27日）
11月 霜月	○文化の日表彰式（3日） ○小鳥山の紅葉（上旬） ○七・五・三（15日）
12月 師走	○針供養（8日） ○冬至（22日） ○クリスマス（25日） ○大晦日（31日）

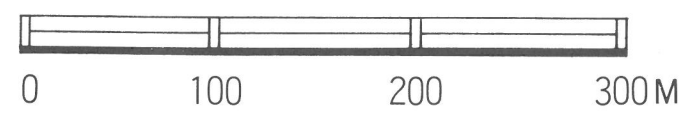


三春絵図





企画／三春まちづくり協会
街並特別委員会
製作／FINISH 503
*許可なく、複製・転載を禁ず。





安永の頃に、藩主秋田 倩季によって、大手城門外の、今の歴民駐車場敷地に創設されたらしい。天明5年の大火でお城と共に、この学校も焼失した。

倩季は、直ちに復旧を命じ、寛政年間に竣工した。

藩学校は、講所とよばれ、江戸の湯島聖堂から、書生杉沢某と鳥居章左門をまねき、門弟山地順祐、平賀英助が教師となったと記録されている。その後、江戸から丹羽雲記、二本松から村瀬主税などを招いて振興をはかったので、倉谷鹿山、奥村俊蔵、大関勘山、山地立固等の儒学者が、ぞくぞくと出た。

この講所は、一名「明德堂」と呼ばれている。創設の藩主倩季が名づけてみず

から筆をとって、現在小学校に残っている額を書いて賜ったという。

明德は、大学という本にある「大学の道は明德をあきらかにするにあり」からとったものである。

儒者（漢学者）として、また書家、画家として有名だった倉谷鹿山も、この明德堂の先生で、学長という制度をつくった最初の学長だといわれている。常葉の鹿山生まれの又八（鹿山の俗称）が、倩季に見出され、武士の階級に列し、百石を給せられたという。鹿山も偉かったのだろうが、倩季の英明も見逃せない。

この講所門も、大火後、天明以後の工事だろうから、大体170年前のものである。

講所は、廃藩後、明治8年磐前県師範学校となり、刈宿仲衛校長の下に開校されたが振るわず。同15年、田村中学校（旧）ができた

が、これも振るわず、同15年に閉校した。

その後、蚕業取締所がしばらくおかれていたが、昭和の中頃、公会堂となり、青年学級となり、やがて警察署とかわった。

そして、昔のかやぶきの建物が影を消し、講所門も木羽ぶきが銅でおおわれて、小学校入り口に移されている。

大町の沿革

大町の昔は町家が少なかった。本城の大手門（今の小山歯科医院）から守城稲荷までは、町家が全く無く、現在の小学校敷地に本殿があり、通りに沿って奥家老奉行、公所、近習、目付等の公議人や役宅倉庫が並んでいた。

会下谷は、百石谷と呼ばれて百石程度の藩士が軒を並べていた。

お城は無論お城山にあったが、藩主の住んでいた御殿は下の御殿だった。その御殿跡に、明治5年小学校が建てられたのである。以前には、上り口の土手に松の古木が数本あり、昔のおもかげをしのばせた。校庭に藤棚のあったことをおぼえてい

る人も多いだろうが、あの辺にお能の舞台があったと伝えられている。

大町四ツ角の石橋は、文政13年にでき、その工費が39貫150匁と記録に残っている。

石橋の傍らに道路原標があり、三春から各地への距離がしるされてあった。それによると、

白川	11里26丁
若松	17里19丁
二本松	5里32丁
福島	11里
米沢	21里半
仙台	32里22丁
盛岡	79里23丁
中村	17里35丁
平	17里20丁
棚倉	14里33丁

明治になって廃藩置県で、城はとりこわされたが、官衛役所が次々に新設された。郵便局は明治5年、電報は同7年、国立93銀行は同10年に、それぞれ創立を見た。交通が今のよう発達していなかったのも、中通り地方での主要な物資集散地としてさかえた。生糸、羽二



重、葉たばこ、馬のほか、手縫足袋など、東北六県どころか遠く北海道方面まで移出していた。その中心は大町商人であった。

伊賀屋の手縫足袋など、明治の中期まで、年産160万円程度の生産を挙げていたという。

町の中央にある紫雲寺は、栃木県大沢にある円道寺の末寺だが、明治9年の火災で焼失した。藩政時代は滋野太兵衛供養料として3石7斗6升を毎年寄進されていた。境内表面には磐州河野広中の遺髪を埋葬して、大石碑が大正15年にたてられ、当時の大臣や政党知名人の寄贈した石灯籠がズラリと並んでいる。また滋野太兵衛切腹梅の古木があって、昔語りをたどるよすがとなっている。

②お城山

三春城（舞鶴城）は、永正元年（約480年前）田村義頭が築き、隆頭、清頭三代の居城とした。天正14年まで80年間は、三春に拠る田村氏の活躍した時代である。

清頭は相馬氏から妻を迎え（岩井沢、古道、葛尾はその持参領）、娘の愛姫を伊達氏に嫁がせ、一応安泰を保ったが、天正14年、清頭が急死してから衰運の一端をたどった。すなわち同年から17年まで伊達氏の政下におかれ、さらに会津領となっていた。その間約50年、三春は廃城状態にあった。

寛永4年松下長綱が二本松から三春に入り、10年の歳月を費やして城を改築し、その際城閣の一部を新たに

造った。

その後、正保2年秋田俊季が宍戸（茨城県）から移封になり、三春に入城し、明治の廃藩当時の映季に至る11代200余年の長い間、秋田氏の居城となっていた。その間、城については改築等の文献が残っていないから、殆ど修理程度の手を加えたにすぎなかったものと思われる。

明治2年廃藩置県となり、城は兵部省の手で取り払われ、残った石垣まで三春小学校の建築に使われたので、古城をしのぶよすがは、物言わぬ大志多山だけとなった。

三春城霞ヶ井戸

三春地方に多い山城は、山上にあるため水の有無が大事である。井戸がなければ長期の籠城は不可能だからである。

田村48館の跡を示す城館記録には、城名の次に必ず「城上無水」と書かれている。

三春本城の絵図には、ほとんど3ヶ所の井戸が書き込まれ、亀井口の霞ヶ井戸はその1つである。城郭の低い所に位置し、近くの亀井水とともに三春の名水に数えられてきた。

三春城跡には、絵図に描かれたさらに上部に2ヶ所の井戸跡があり、隠し井戸とされてきた。「東日流（つがる）外三郡誌」の三春城本丸のスケッチには、本丸中央部に井戸が描かれ、2ヶ所の隠し井戸を結ぶ線上に位置する。

本丸地下に水路が貫かれているのではないかと考えられている。

北町の沿革

安政6年（約130年前）の三春町戸数調べを見ると、商家は八幡町48、中町50、荒町78、大町56、新町67、北町40で計339戸、外に扶持取り士分152、足軽小身者330、総戸数821である。

北町は切通しを入れて40戸、町内の最小区域、それから上方は士族屋敷だった。三春城も田村時代には正面御門が天神橋にあり、反対側の丘に田村頼頭の居城椿館（月斎館）があった。山一面が椿林で、そうよばれていたのである。頼頭は城主義頭の弟で甥の隆頭を助



③天神様のなで牛

菅原道真の霊を神として崇めたのが天神信仰である。

九州の太宰府は、流された道真が、それを怒って雷を落すと信じられたのが火雷天神信仰となり、平将門が火雷天神を奉じたのは有名である。三春には富沢に火雷天神がまつられている。

道真は、学問にすぐれ、書をよくしたため、学問の神として広く信仰をあつめている。

北町の北野神社は、正保

け、安積・岩瀬・石川の戦陣に武名を馳せた雄将だった。

館の東に、貴重な文化財「弘安仏」を持つ光岩寺があり、松下重綱の妻の墓が残っている。その坂下には城下一の井戸「亀井水」がある。

北町は、明治以来、政治家を輩出している。河野広中が北町に居を構え、湊季松が住み、野口忠夫、湊徹郎の両元代議士が、奇しくも亀井であった。

持合畑は、旧藩時代、藩主のお花畑だった。明治の末から大正にかけて養蚕講習所があったが、大正23年高等学校となり現在にいたっている。

3年に城下六町の制を定めた際、北町の鎮守として城内に奉られていたてんじん神を現在地に遷したものである。

北野神社には、慶応元年奉納の撫で牛がある。三春に生糸や煙草を買い付けに来ていた近江国の商人が美濃産の石を信濃で加工し、はるばる三春に運送してきた立派なものである。

道真は牛に乗って太宰府に行ったといい、牛の頭をなでると頭がよくなるという信仰があり、三春人形にも牛乗り天神の名作がある。

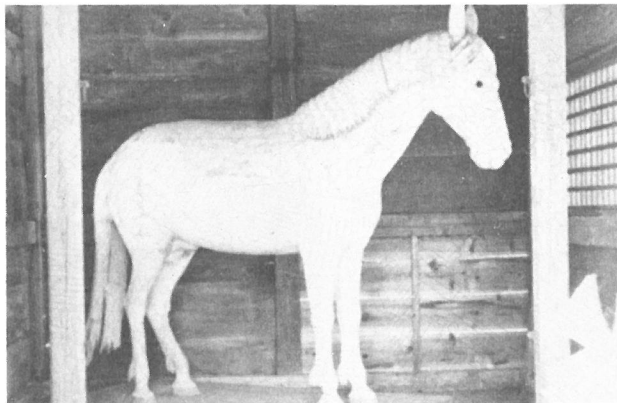


↘ 由来している。

御厩跡に、明治12年旧藩士たちが交付公債出資で製糸工場厚生社を設立したが、士族の商法で事業不振、32年には三盛社に合併された。三盛社は今の中学校敷地にあった。

④三春大神宮の白馬像

三春大神宮の石段を登りきって、拝殿に向かい左側に馬小屋があり、その中に御神馬として白馬の像が納められている。



この白馬は、文久年間今から約120年前に、藩主秋田ひろ季が藩の総鎮守三春

↘ 大神宮に奉納したものだと

伝えられている。作者は、文珠村石森の伊東光運で、作成の指導に当たったのは、藩の馬術（大坪流）指南役であり、当時駒奉行だった徳田三平好展（二代研山）である。

光運は、通称を官吾といい、父は法印観正院といった。光運は祖父の業をつぎ、木工を業とした。意匠がうまく、特に彫刻に秀でていた。現存する大元神社の仁王像一対、同神社の柱や梁の彫刻、愛宕神社の唐獅子

年の昔である。病弱の人で早くから家事を嫡子隆頭にゆずり、ト西と称していた。守山と同じく山中という地名をつくり、田村大元明王を祀り、赤沼の丈六仏や、八丁目の福聚寺も三春に移した人だから、三春町創設の功は高く評価されていいだろう。次子憲頭を船引に、三子頭基を仁井田（今の小野町）において勢威をふる

など、皆彼の作品である。二本松にも作品が残っているという。↗

馬の像は、当時の俊馬を模したもので、その製作中指導監督役の徳田三平は、モデルとなった馬に乗り毎日三春から石森に通い、不備な点を何回もおさせたものだという。均整のとれた馬像は、今の世の専門の人の鑑賞にも十分堪え得る作品である。

⑤田村3代の墓（福聚寺）

田村3代というのは、田村義頭（坂上田村磨25代の子孫盛頭の子）、隆頭、清頭を指している。

田村義頭は、後柏原天皇、足利11代の義澄將軍時代の人で、三春城を築いた人である。三春を居城として守山から移って来たのは、永正元年だから、今から約480



年

隆頭は義頭の長男、一族重臣を領内の要地48個所に

↘ 配して武備を固めた。これが田村48館である。内を固めると共に、外敵に対して果敢な攻勢をとった。安積、岩瀬を傘下におさめたが、野心家伊達氏と衝突して、天文10年には、その外領の大半を失ってしまった。相馬頭胤の仲介で、一時は伊達氏と和を保ったが、離反をつづけ、その他、芦名、石川、二階堂、岩城、佐竹、白河等と和戦常なく或る時は、上杉、武田、北条等関東から越後の雄将とも交渉があって、戦国の世に田村の名を高らしめたのである。

清頭は相馬高胤の子を室とし（古道、岩井沢、葛尾、南津島はその持参領）、娘の愛姫を伊達政宗の室に出して、守備を整えた。この

結婚政策により、二階堂に御代田、今泉、白岩等の諸城攻められ、危機一発の場合にも、伊達氏の後援があって、難を免れることができた。

その後、戦国乱雲の中に亡んだが、愛姫が生家の滅亡を悲しみ、孫宗良に岩沼3万石を貰わせて田村氏を再興、のち一関に移った。

田村三代の墓は現に福聚寺にあり、右から義頭、隆頭、清頭の順に並んでいる。

新町の沿革

山中の名は、田村清頭（天正年間約400年前）が、田村大元明王神社を舞鶴本城から現在の地に移した時、守山の大神社の鎮座地名山中をそのまま呼ばせたのに始まっている。山中から清水にかけては侍屋敷、新町は商家と区分されてた形だった。

大元神社は秋田藩総鎮守



⑥田村大元神社の仁王像

大元神社は、寛文10年7月晦日（約320年前）に炎上し、本殿拝殿は再建され、今の仁王門は、慶応元年（約120年前）に竣工したというから、その際に安置されたに違いない。しかし、再建された社殿は明治2年に取りこわされており、現在のは明治32年に新築されたものである。

仁王尊像の作者は伊東光運と伝えられているが、一説には芹ヶ沢の西尾官吉だとも言う。光運の監督で官吉が彫ったのかも知れない。用材は常葉産の公孫樹。

光運は石森の人で久我之助観吾と称し、父は観正院の法印であった。木工に秀

↘ で、6月14日から3日間の祭典は、藩主催で5万石領挙げていかめしく執行されたという。

家畜セリ場は、藩政時代から馬市で栄えた。

三春駒の名と共に、江戸時代から長期にわたって繁昌した庚申坂は、僅かに残る格子戸に昔の面影をしのばせている。

新町の町はずれには、六地藏があったが、いまでは見る影もない。

↘ で、三春大神宮の神馬や大元神社門柱梁の彫刻等の作が残っている。仁王像の下絵は中村寛亭だとも伝えられている。

ところで仁王二尊は、金剛力士ともいい、仏法の守護神である。左は密せ金剛、右は那羅延金剛で、共に裸体で腰に布をまとい勇猛な相をしている。左は口を開き右は閉じて、あうん、の対をなしている。

明治維新により、神仏混淆を禁止されたため、棄却のうき目をみた仁王像が、真照寺に拾われて仮の宿を借りていた。終戦後、信仰の自由開放となり、神仏混淆禁も解けたので、新町地区の熱望と、文化財保護の施策とが実を結び、移転となった。

⑦庚申坂

三春庚申坂吉原まがい、前に田もある土手もある三春庚申坂七色狐

わしも二三度だまされた盆唄でうたってはいるが、今の若い人たちには全くわからない「庚申坂」である。中年の人でも、庚申坂は終戦時まで遊廓のあった弓町だと思っている人もあろう。しかし、唄われている庚申坂は、新町を南にぬけ、化粧坂を登りつめた左側の細道をたどったところである。正しくは、字庚申坂23番地から38番地一帯の地である。

庚申坂遊廓は、記録によれば、文化9年11月、秋田晴季時代（約180年前）宮城屋、花屋、武蔵屋の3軒が湯を設けた。恐らく江戸文化の流れと思われる。維新後は一般庶民に解放され栄えてきた。↗



↘ 遊女は、新潟、山形、会津等の落ちぶれた武家の娘が多く、従って格式と尊大振りが特色で、舞や作法も他に見られぬ風格を持っていた。

明治5年5月、新制により弓町に移転、宮城、島村、二葉、島屋、花屋の五楼が開業した。

馬に煙草に蘭と、特産物を持つ三春地方だから、商人の出入りも多く、この花街は繁昌して名所とさえなった。一時は遊女の数も30人を数えた程である。そして、ここに移って売春法の施行まで約60年の間には近松の作品に見るような、幾多の情話を生んでいる。

浮川竹に身を沈め、夜の花と狂い咲いた悲劇の女たちの内、籠の中で生命を終わり、引取人のなかった数多くの無縁仏は、裏山づたいに天沢寺の草深い墓地に、悲しく埋もれている。

コミニティだより		「三春わが街」第七号	
発行日		昭和62年3月31日	
発行		三春まちづくり協会	
事務局		三春町商工会内	
編集		三春まちづくり協会	
調査広報特別委員会		街並特別委員会	
事務局		三春公民館内	
TEL (六二) 三八三七			

春の江戸街道を歩く！

きまぐれ紀行

息子「こんなにジュース買って、いったいどこまで行くの？」
父親「今日は天気がいいから、歩くと喉が乾くだろう。それに途中では売っていないかもしれないだろう。」

● せっくうに行き先を言わない父親に、少々不満げにコンビニエンスストアの袋をかかえて子供がついて出て来る。今日はこの親子が行く道を二人に見つからない様に、あとからついて行こうと思ひます。

息子「おじさん！そこでかくれて何やってんの？」

父親「おい、これを見てごらん。」

● 父親の指さしたのは、コンビニエンスストアのすぐ向いにある小さな祠である。

父親「これは六地藏と言って、江戸時代につくられたものなんだ。三春が城下町だったことはお前も知っているだろう。そのときの殿様で秋田と言う人が三春に来たときに、町に出入りする六つの道筋を選んで造らせたものなんだ。これから行くのは、この六つの道の中でも一番重要だった江戸街道を二人で歩いてみようと思うんだよ。どうだおもしろそうだろう。」

● ここで一言、この六地藏は天保二年（今から約百三十年前）に三春に入城した藩主秋田俊季が、同五年城下の入口六ヶ所に建てたもので、俊季がこの六地藏を建てたについては、病盗難を除け、信仰による思想善導の意味と、人心一新の政治的意図があったようである。

● この八幡町の他、馬場、新町、清水、御旗町、小浜海道のそれぞれ町端れに建てられましたが、現在、昔のままの姿で残っているのは馬場口のもので、地元の人々の手で御堂が造られ、毎年四月八日には、祭りも営まれていきます。小浜海道（中学校下）にあったものは、コンクリートの修理が加えられ、荒町の龍徳院に移されています。かつては、城下の人々や町に出入りする善男善女の信仰を集め、赤い前垂れ、延掛け、四季折々の花で飾られた昔の姿はなく、砂埃をあげて車が行き交うだけです。

息子「父ちゃん、あの人がお地蔵さんの前で何かブツブツ言っているよ。」
父親「気にならないでこっちへ来てごらん。これは何と書いてある？」

息子「雁木田橋」
父親「そうだ。でも昔は『江戸橋』と言ったらしい。今でもお年寄りの中にはそう呼ぶ人もいるだろう。さあ先を急ごう。」

● おどり場から六地藏、桜川を渡りいよいよ江戸街道の旅です……。

父親「ここには来た事があつたかな？」
息子「知ってるよ。八幡様の遊園地で遊んだ事あるよ。」



春爛漫……。

父親「この八幡様の境内に石灯籠があるんだが、これには面白い言い伝えがあるんだよ。昔、三春が大変栄えていた頃に、江戸街道をはるばる三春まで商売をしに来た人がいたんだが、もう少しで三春の城下に入るところで、突然追割に出合つたそうさ。旅人が、『お金は差し上げますので、命だけは助けて下さい。』とお願ひしていたところ、馬に乗り伴を連れたいお侍さんが通りかかって、追割を追いはらつてくれた上、城下のすぐ近くちょうどこの八幡様のあたりまで送ってくれたそうさ。それから自分の住まいと城下の道順を教えるところを、翌朝この旅人が、昨日のお礼をしようとお教えられた住まいをたずねると、そこは六地藏のお堂で、近くには八幡様の杉森があつたそうさ。旅人はハッと気がついて、これは日頃信仰している八幡様の御加護の賜と悟り、翌年の秋のお祭りに献上したのが現在ある石灯籠だそうさ。」

● またしても一言。現在八幡神社の境内にある一対の石灯籠には、『寛永七年八月十五日施主大久保清八、下総国結城の住』と刻まれています。

今から三百年前、三春の特産として折返し糸があり、二、七の市で取引され、全国の織物地に移出されていたようです。結城（茨木）の商人もそのお得意さんだったようです。伝説は伝説として当時の三春の産業と商人の往来を物語る史蹟とも言えます。

息子「また何か言っているよ。あの人……。」
父親「いいから気にしない。」

● ここから登り坂となり、その先はY字路となる。左は今の県道谷田川線、江戸街道は右へ折れて行く。

息子「この坂は急だからくたびれるよ。」
父親「この坂は『並松坂』といつてその名のとおり昔は道の両側に大きな松並木があつたらしい。しかも今よりずっと坂も急で、ちょうど左手の土手の中段に昔の道の形が今でも残っているんだよ。道のかたわらには石で作られた碑も建っている。」

息子「昔の道は今よりずっと狭かつたんでしょ？」

父親「交通手段は徒歩か馬、そして駕籠ぐら

いだったろうしもちろん今みたいに車はないだろう。だから、せいぜい馬と人がすれちがえるだけの道幅があれば十分だったんだよ。」

息子「しかしそんな狭くて急な道を江戸まで歩いて行つたなんて、ちょっと考えられないよ。」

父親「江戸までは六十三里（約二百五十キロ）で五泊六日の旅だったんだよ。新幹線で一時間強の今とは大分様子がちがうな。だから当時の人にとつて江戸への往復は、大変な出来事だったろうな……。」

● 並松坂を登りつめると、右手に視界が広がります。遠く安達太良から吾妻にかけて奥州連山が眺められ遠望のよい場所です。

父親「ここらで一休みするか。」

イワキポンプから鷹巣へ……。



● 休日のせいか、車の往来も少ない。道端に並んで腰をおろし、さつき買ったジュースを飲んでいる父子の遠方には、新市街地の家並が広がっている……。

息子「父ちゃん、まだ歩くの。くたびれたよ。」

父親「だらしないな。江戸時代ならば、まだ三春を出発したばかりだぞ。この先に殿様のお休み場だったところがあるから、そこまでいったら今日は帰ることしよう。」

父親「さあ、ここがお休み場だ。参勤交代というのは知っているだろう。昔、殿様が行列を組んで三春から江戸まで往復していたんだが、江戸までの間ずっと『下に下』と行列していたわけじゃないんだ。三春から江戸へ行くときには、城下からこのお休み場まではきちんと行列を組んで来て、ここから先は普通の旅姿に着替えて江戸まで旅をしたらいい。逆に江戸から帰って来る時も、このお休み場まで来て、一端行列姿になって三春の城下に入ったそうさ。」

● それで、おもしろい話があるんだ。三春の殿様が江戸から三春に帰ってくる時、このお休み場で着替えて城下に入ってくるんだが、城下ではお迎えするために、並松坂の頂上あたりに見張りの人を立たせていたんだ。そこから行列が見えたとお知らせにもどるんだが、殿様の行列にお尻を向けるわけにはいかないものだから、あの並松坂を後向きでおいていったらしい。今でさえ急な坂道だから、ましてや松の根っこなんかがあつたらうから、何回何回も転がっては知らずに帰つたそうさ。」

息子「江戸時代って大変だったんだね。」
父親「さあ、今日はこの辺で帰るか。昔の人の苦労も少しはわかっただろう。また機会があつたら、この先を歩いてみよう。」

● 江戸街道はさらに鷹巣方面へ向かう。道が、番低くなり、現在も川が流れているあたりで今の県道須賀川三春線と一緒になる。なおこの川にはその昔、『天狗橋』という橋がかかっていたらしい……。

（新野）

①藩講所と「明德堂」額

三春小学校の正門をくぐる人は、「何だろう、随分古い、狭い門だ。昔のお城の門だろうか。」と、一応ふしぎがる。

あの門は戦後、今の歴史民俗資料館の駐車場に警察署が新築された時、現在の場所に移されたものである。そこは、むかし藩学校があったところである。

三春の藩学校は、明和か



昔の三春

りちいふ6Wこんなおもてな!

荒町の沿革

荒町は、旧町内で一番広い地域を占め、昔から商工業の盛んなところだった。

工業といっても、製糸場、羽二重工場だが、旧藩時代から明治・大正にかけて盛んだった。現在の三春中学校敷地にあった三盛社は、女工150名位を使って、県下でも二本松の双松館と1、2を争う、機械製糸工場としてきこえていたものだが、戦時中に閉鎖してしまった。

街の西側、山の手には、法蔵寺、高乾院、光善寺、龍隠院が並び、あたかも寺町の観がある。高乾院、龍隠院は秋田家の墓地、家老以下侍の墓所があり、昔のお盆の墓参りには、家老から軽輩まで、それぞれの格式で行列を練り、町家の者は歩くのを遠慮する有様だった。侍は12日、町家は13日の墓参日を決めたのも、こんな混雑を防ぐためだった。

道路は、日和田・本宮口と、小浜海道口とがあった。本宮線は、大正3年磐越東線三春駅ができて一変した。小浜海道の方は、二本松領川東3万石の小浜・針道方面との物資輸送、羽二重の川俣まで生糸を運ぶ外、馬・繭・たばこを運び繁昌した。

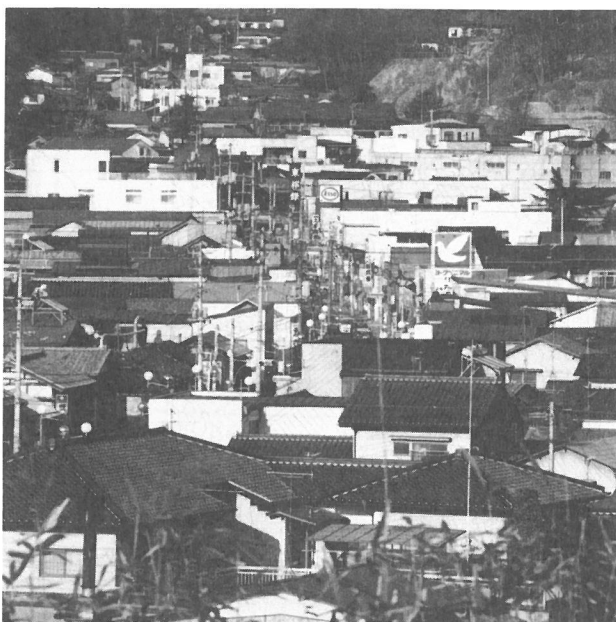
馬頭観音は古い由緒を持っている。田村清頭が安置したというから約450年も昔からあったわけだ。東堂山、堂坂と共に3観音と呼ばれ、庶民の信仰を集めていた。

3月17日の縁日には、近郷近在から仔馬のできた飼主たちが参詣して、餅を

まいて祝ったものだ。



▲ 御 廟 墓



江戸への往復

旧藩時代の旅は、駕籠、馬の乗物以外は皆徒歩だった。三春から江戸へ63里の旅は5泊6日が常識で、現在と比べると、夢のような話だ。

道中案内によると三春城下から江戸愛宕下秋田邸までの順路は、

並松坂一沼倉一当連赤坂一鷹巣一里塚一大井戸清水一蓮倉一荒井一赤沼一森山(守山)一須賀川一笠石一久来石一矢吹一不問瀬一太田川一祢田一白川一白坂一(ここまでが現在福島県)一芦野一越掘一太田原一作山一喜連川一氏家一白沢一宇津宮(現宇都宮、丸屋小平が藩の定宿)一雀宮一石橋一小金井一小山一間々田一野木一古河一中田一栗橋一猿手一松戸一耗壁一越貝一佐岡一千寿(今の千住)今戸橋一浅草御門一京橋一尾張町一愛宕下秋田邸。

この長い道中、名所旧跡や土地の風物に旅愁をまぎらわしながら、気長に歩き続けたのであろう。

しかし、何か突発事件があり火急を要する場合は、6～8人交代で、夜通し3日半の早駕籠で連絡したという。

保安の不十分だった昔だから、道中においほぎ、すり、ごまのはいが横行していて、一人旅は禁物とされていた。

文化初期(約180年前)藩主秋田孝季の奥方になった因州鳥取城主池田35万石の姫君が、道中供揃えの行列で、2カ月余もかかって三春城に嫁がれたという昔語りなど、今では想像のし

ようもない。

六 地 蔵

六地藏は、正保2年常陸国実戸から三春に移封された。藩主秋田俊季が、同5年に城下の入り口6ヶ所に建てた石彫像である。

一体六地藏というのは、延命、宝処、宝手、持地、宝印、堅固意の6菩薩で、6道に現れて衆生を済度する功德を持つものだという。

秋田俊季が入城早々この六地藏をたてたについては病盗難を除け、信仰による思想善導の意味もあっただろうが、人心一新の政治的意図もあっただろうと推察される。

仏教の6道にちなんで、城下出入の6道を選んだわけで、八幡町(旧江戸街道)馬場、新町、清水、御旗町、小浜海道のそれぞれの町はずれに建てられたのである。旧藩時代は何れも完全な形を残していたという。

明治維新後は道路改修工事がしばしば行われたし、神道国家のあおりを受けて、仏教信仰が衰えてきた影響もあり、六地藏尊も次第に姿を消して行った。そして、現在昔のままに残っているのは、馬場口のもので、地元有志の手で御堂が出来、その内に安置されている。

小浜海道にあったものは、コンクリートの修理を加えられ、荒町の龍隠院の山門近くに移されている。

かつては城下の人々や、町に出入りする善男善女の信仰を集め、赤い帽子や前垂れよだれ掛け、四季折々の花で飾られた昔のおもかげは、今はない。

八幡町の沿革

八幡町という名称が生れたのは、秋田領になってからだから、約340年位昔のことである。

田村清頭時代は、大元神社と八幡神社を城中にまつていたが、秋田俊季が実戸から三春に移封になり入城するに及び、田村大元神社は山中の現位置に、八幡神社は城下門外の今の場所に移された。八幡神社は源家の氏神、秋田氏の祖安倍貞任の仇敵源義家の守護神だったからである。それ以後八幡町と呼ぶようになった。

城下門は今の武田商店のあるところで、南北に高い土手を築き、境界に与力、同心が番をしていた。八幡町は町人町で少数の給人が住んでいたが、旧江戸街道の出入口だから、城下第1の要所として、六地藏が立っていた。

明治20年に三島県令の手で今の郡山路線が開かれ、24年馬車鉄道株式会社が創立、大正3年磐越東線(当時は平郡線といていた)が開通するまで営業していた。

明治32年に新設された日本専売地方支局が、田村全郡の葉たばこを扱っていて、収納期には大賑わいだった。

日本化学の三春工場は大正15年に操業開始で、暫くの間三春唯一の工場であった。

中町の沿革

中町は昔から商売で繁昌して来た。毎月の2・7日に市が立ち、折返し糸やたばこ等の農産物から工芸品まで出廻っていた。

御免町は侍屋敷で、今も昔ながらの屋敷跡を残している。

昭和まで料理店を営んでいた玉川(佐々木)は、会津120万石所領時代(約350年前)70年間の代官所であった跡である。

馬場尼ヶ谷全地域は、昔の御既跡で乗馬の練習場だった。馬場は100間馬場で、馬場桜が春毎に見事に咲き誇っていた。

三春大神宮は、貝山地内から元録2年(約300年前)今の神垣山に遷宮された。

福聚寺は永録の頃(400年前)日和田三丁目から移され、田村義頭、隆頭、清頭三代の菩提寺、同じ御免町前記玉川の隣地には、不動尊を安置した清水寺があった。不動山の名はそれに

